平成一三年七月一九日（木）

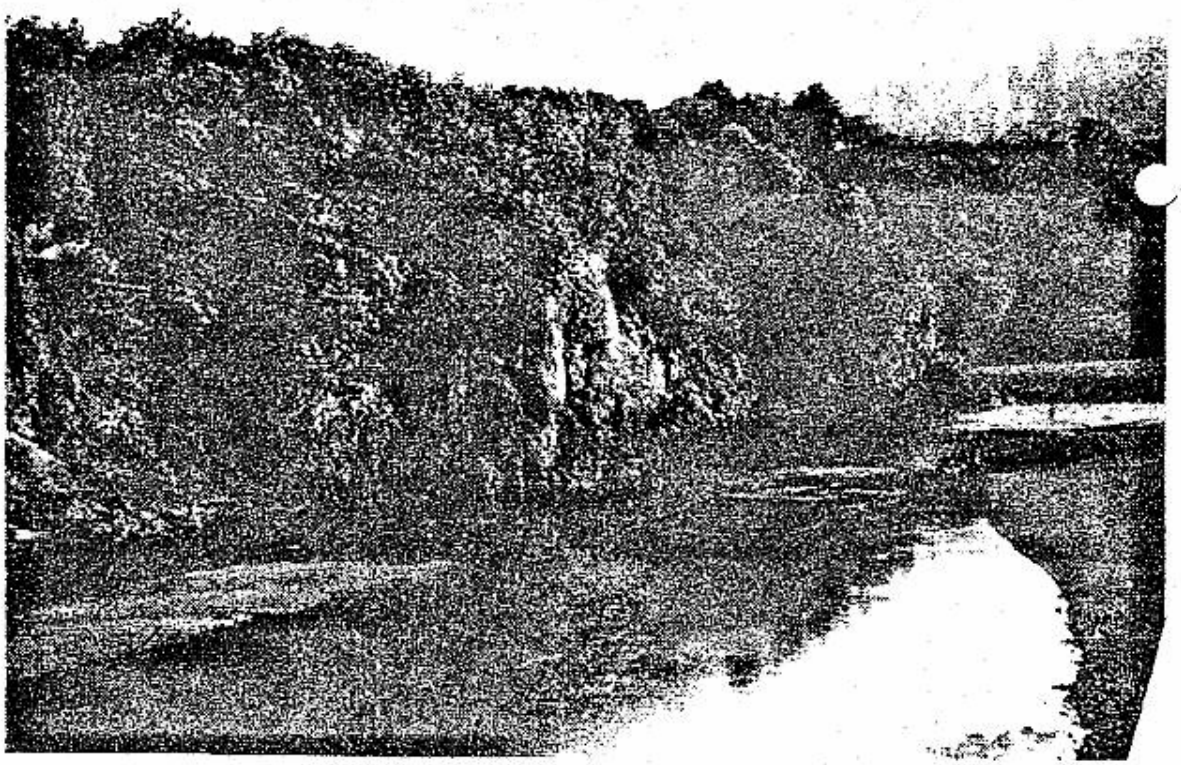
第二九一回史跡めぐり

武蔵国

埼玉の古い城下町

寄居

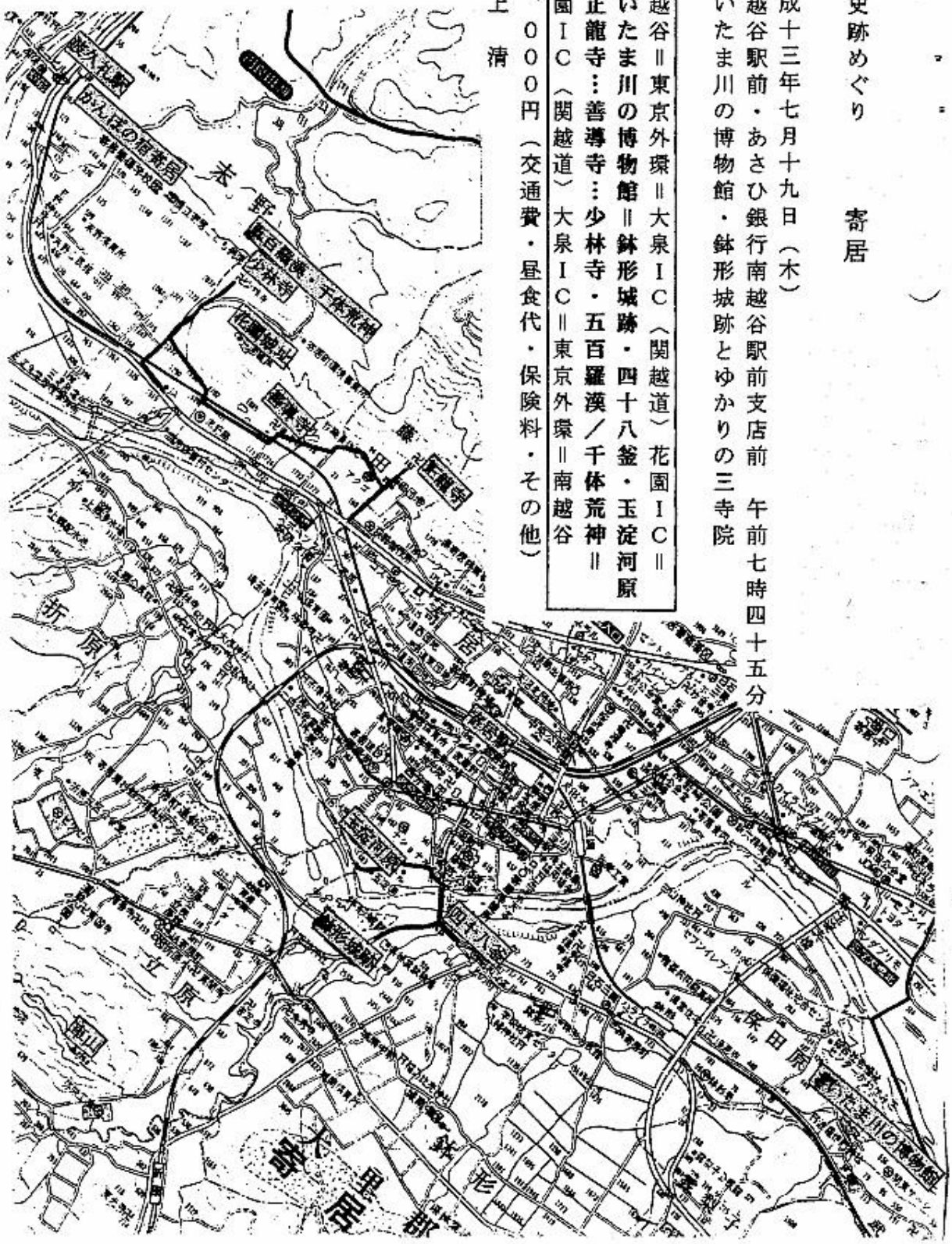
越谷市郷土研究会



荒川に臨む鉢

第二九一回史跡めぐり　寄居

・日　時　平成十三年七月十九日（木）
・集　合　南越谷駅前・あさひ銀行南越谷駅前支店前　午前七時四十五分
・行き先　さいたま川の博物館・鉢形城跡とゆかりの三寺院
・コース　南越谷＝東京外環＝大泉ＩＣ（関越道）花園ＩＣ＝さいたま川の博物館＝鉢形城跡・四十八釜・玉淀河原＝正龍寺…善導寺…少林寺・五百羅漢／千体荒神＝花園ＩＣ（関越道）大泉ＩＣ＝東京外環＝南越谷
・参加費　五，０００円（交通費・昼食代・保険料・その他）
・案　内　水上　清



◆寄居町の概要

埼玉県北西部大里郡の町。昭和二十年、用土、折原、鉢形、男衾の四村が合併した。人口三一，七二〇（二〇〇〇年調査）。

秩父山地から流れる荒川が山間部を経て台地に出る谷口に位置する。寄居は人々が多く寄り集まって居住した所、即ち城下町を意味する。中世に藤田氏の花園城の城下町として発展しのちに対岸の鉢形城の繁栄とともに今日の位置に移った。ＪＲ八高線、秩父鉄道、東武東上線、国道一四〇号と二五四号が通じる。鎌倉街道（上道）も現在の関越道も寄居を通る。

長瀞玉淀県立自然公園の一中心地。荒川の川石の産地として知られた。

●日本水……環境庁の「名水百選」、林野庁の「水流の森百選」、国土庁の「水の郷」に指定される。

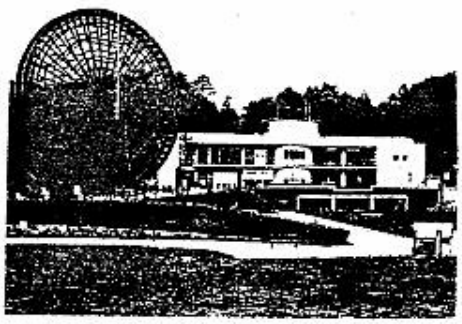
釜伏山頂上北面の百畳敷岩から湧き出る清水。日本武尊が東征のおり、剣をさすと湧き出たという。

●風布みかん園……みかん栽培の北限としてしられる。北条氏が小田原より移植したと言われている。

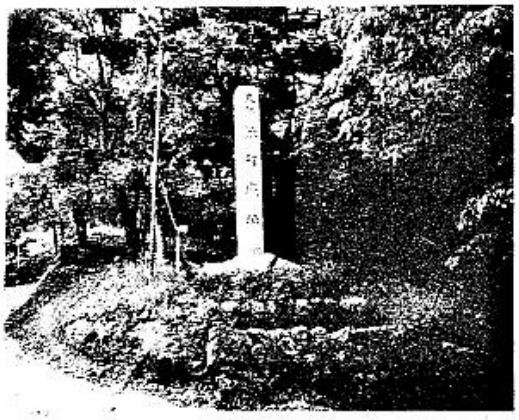
◆さいたま川の博物館

平成九年八月に埼玉県により荒川右岸の広い敷地に設置された、荒川と人々のくらしのかかわりを楽しみながら学べる博物館。四万平方米あまりの敷地は、本館やレストハウスが建つ上段、噴水広場や荒川大型模型１７３（１／１０００）などがある中段、イベント広場や駐車場がある下段の三段になっている。これらのゾーンは、園路・階段・スロープ・橋・プラザなどによって結ばれており、来館者は親水施設や屋外展示を楽しみながら散策できる。なお、屋外にはウォーターアスレチック（荒川わくわくランド）や直径二十三米の大水車などがある。

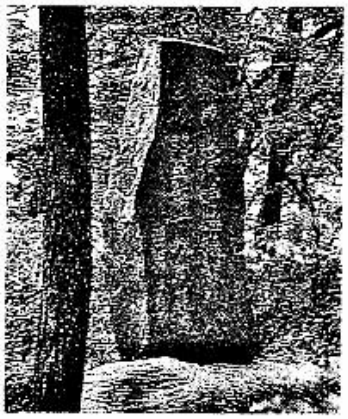
さいたま川の博物館



●史跡鉢形城跡の石柱



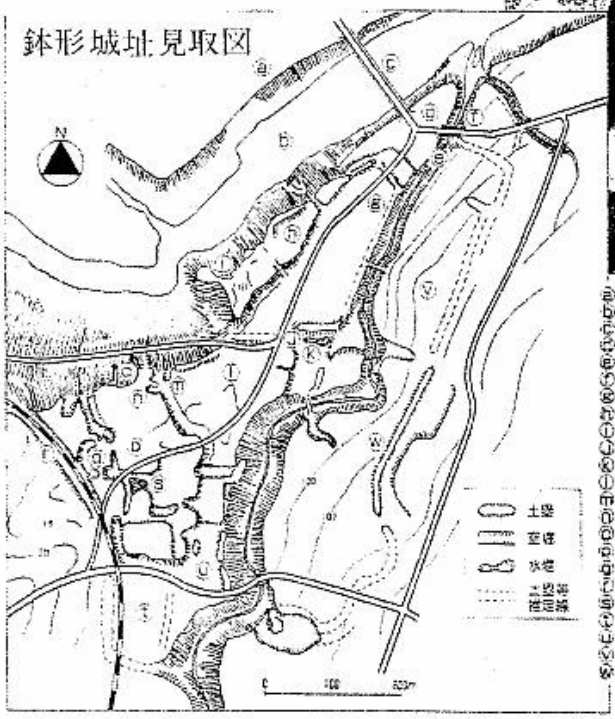
城跡には田山花袋の詩碑もある



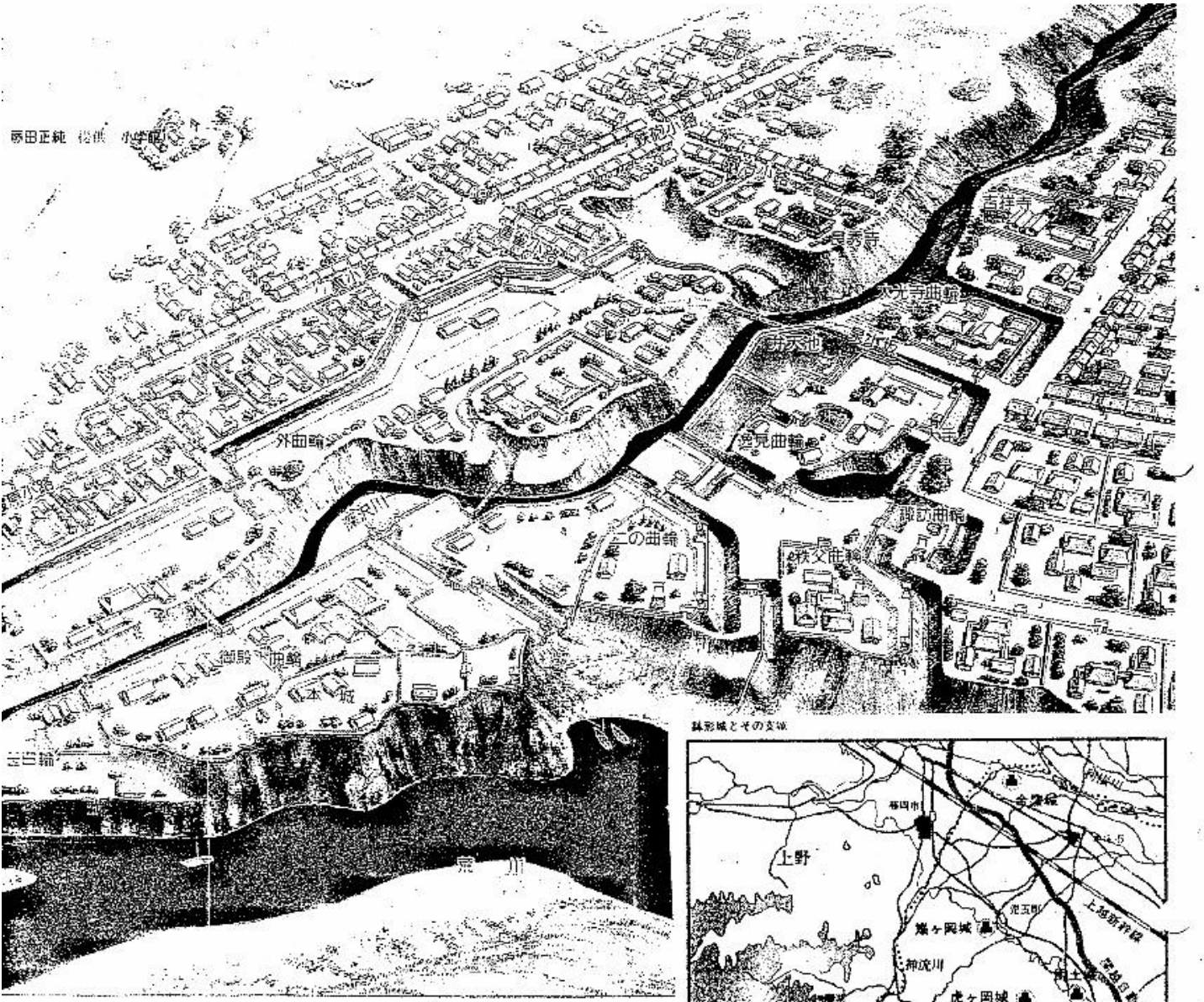
鉢形城全図

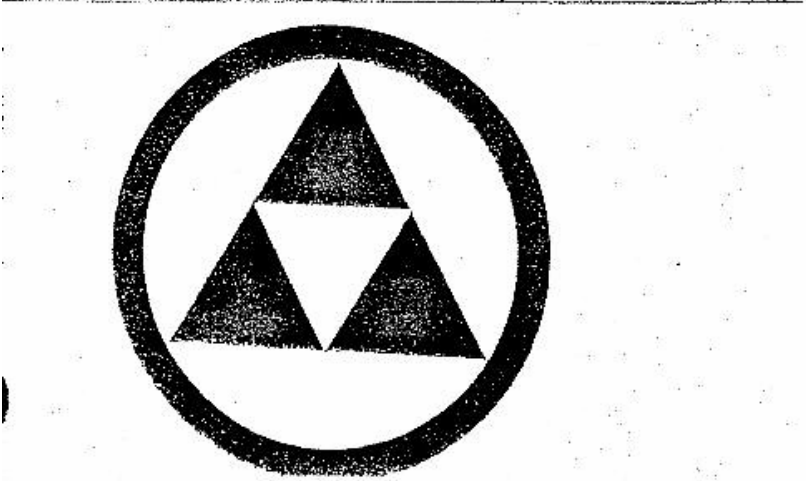
（指導　男門山史編纂事務局　本田昇　イラスト　藤田正純　提供　小学館）

鉢形城址見取図

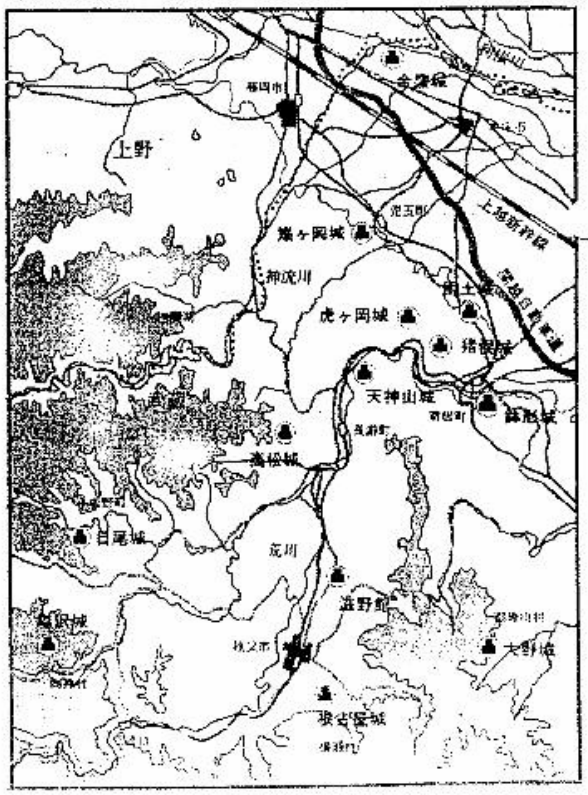


ⓐ 寄居町
ⓑ 荒　川
ⓒ 正覚院
ⓓ 笹曲輪
ⓔ 深沢川
ⓕ 猫手橋
ⓖ 御殿下曲輪
ⓗ 本丸（本丸御殿）
ⓘ 本丸最高所（櫓台）
ⓙ 本丸二の丸間の堀
ⓚ 水堀と堀基道
ⓛ 二の丸
ⓜ 稲山稲荷（櫓台）
ⓝ 臣・御金蔵（馬出し）
ⓞ たて堀・たて土塁
ⓟ 三の丸
ⓠ 諏訪神社（馬出し）
ⓡ 八幡堀
ⓢ 三角池
ⓣ 南側外曲輪
ⓤ 井天池跡
ⓥ 東側外曲輪
ⓦ 外曲輪の土塁・空堀


原田正純 後世 小学校
百体寺
月秀寺
八光寺曲輪
井戸池
外曲輪
宮見曲輪
諏訪曲輪
二の曲輪
鉄父神
御殿下曲輪
本城
荒川



鉢形城とその支城


上野
鉢ヶ岡城
神流川
虎ヶ岡城
天神山城
高松城
荒川
滝野城
大野城
浪士塚城

◆鉢形城跡

鉢形城は荒川の断崖と深沢川の渓谷に囲まれた自然の要害の地にあり、戦国時代を代表する平山城で、関東屈指の名城である。

昭和七年（一九三二）国の史跡に指定された。城跡は、西南旧折原村を大手口、東の旧鉢形村を搦手とし、本丸・二の丸・三の丸・秩父曲輪・諏訪曲輪などがあり、西南部には侍屋敷や城下町、寺院、神社があった。今でも土塁や空堀などの遺構がのこっている。城の大きさは東西三七八米・南北七五五米・面積二十四万平方米の規模。

●田山花袋の漢詩碑……田山花袋が城跡にたってその情景を五言絶句にたくした。

「襟帯山河好　雄視関八州　古城跡空在　一水尚東流」

武者小路実篤の筆になるこの漢詩碑が本丸跡にたっている。

●四十八釜……城の内堀として重要であった深沢川は、いまもなお両岸より断崖絶壁がせまり、灌木天を覆い渓谷のすがたを止めている。激しい渓流は谷底の岩盤をうがち幾多の淵をつくり、いつの頃から淵をかまとよんで「四十八釜」と総称され、現在は、町指定名勝である。代表的な「船釜」は水深三米をこえ、「艫ノ瀧」が落ち込む幽谷美にみちた淵である。尚、古くは當地域は「数釜ノ庄」とよばれ、語源を深沢川の釜にもとめる伝承がいまも残っている。

▼鉢形城の復元整備……寄居町では、鉢形城を将来にわたって保存整備するため、平成九年度から発掘調査を本格的にすすめており、貴重な発見・成果がえられている。

▼埼玉県林業試験場……城跡の敷地内に設けられ、二〇〇余種の植物を栽培している。花木園の見学は無料。

◆鉢形城の歴史

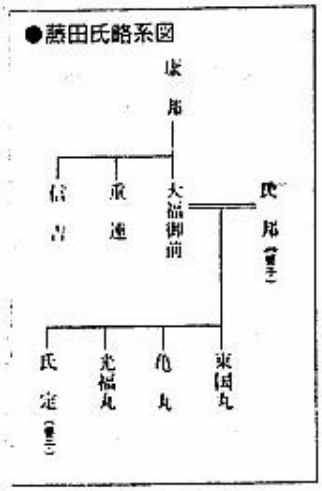
鉢形城の起源は、十世紀の平将門の乱を鎮定する際、源氏の始祖である源経基が本陣をおいたとか、鎌倉時代には畠山重忠が居を構えたと伝えられているが、確かではない。戦国時代の初め、享徳三年（一四五四）に始まった古河公方北条成氏と上杉氏との抗争の記事のなかに「鉢塁」と記されて歴史に登場してくるが、臨時の塁か小規模のものであったらしい。資料の裏付けや城郭構造から文明八年（一四七六）前後に長尾景春が築城ないし整備・補強をしたとする説が有力である。景春は山内上杉顕定の家老であったが、これに背き鉢形城に籠もって

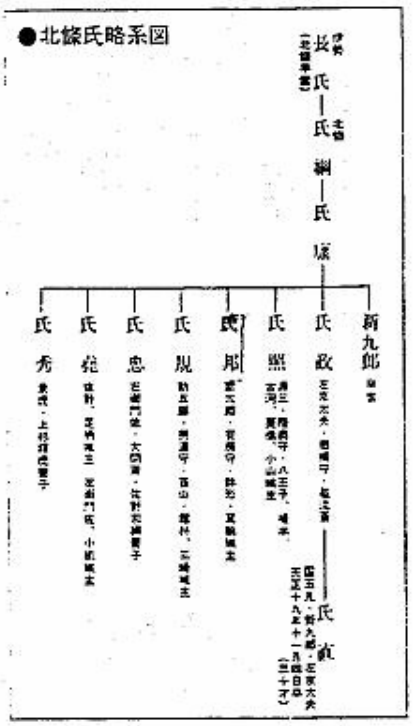
戦った。その後も鉢形城をめぐって争いは続いた。

十六世紀中頃、後北条氏の関東進出で勢力地図は大きく変わった。城は北条氏康の三男氏邦が城主の時に現在の規模まで拡張されたといわれている。鉢形城はそれ自体多くの出城をもっていたが、それより北の厩橋（前橋）・松井田・さらに北方の沼田などの諸城をも支城として七十万石を越える大勢力を誇り、北条氏の北関東支配の拠点となっていた。しかし豊臣秀吉の天下統一が進み、天正十八年（一五九〇）の小田原攻めの際、鉢形城も前田利家・上杉景勝らの大軍の攻撃をうけ、同年六月十四日に落城した。そして江戸時代に入りやがて廃城となった。

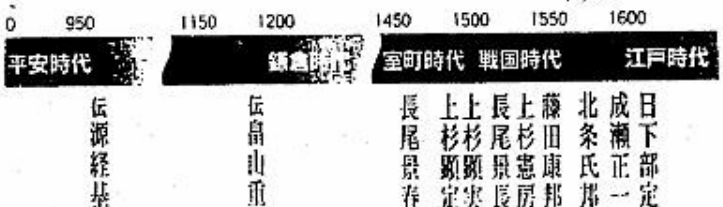
▼北条氏邦と藤田氏

藤田康邦は、中世末野の善導寺の北西側山上に築いた花園城および周辺の藤田郷を中心とする地域を支配した在地領主の藤田氏十五代当主と伝えられる。





鉢形城と関係人物年表



藤田氏は武蔵七党といわれる武士団の一つである猪俣党の系統を引いており、室町時代には関東管領を世襲した上杉氏の一族山内上杉家の重臣として活躍した。

康邦は後北条氏の北関東支配強まる中で、天文十五年（一五四六）河越夜戦で上杉氏が敗退したのをきっかけに敵方の北条氏に属し、北条氏康の三男・氏邦を娘大福御前の婿養子としてむかいいれた。氏邦が藤田氏の名跡を継いで天神山城（長瀞町）に入った後、康邦は長男重連と次男信吉とをつれて用土城（寄居町）に隠退し、名を用土新左衛門尉と改めた。以後、用土新左衛門尉は当時乙千代と称した氏邦からの命令を家臣たちへ伝達する立場となった。しかし氏邦の鉢形入城以後、用土氏の立場はしだいに薄れてゆくのである。氏邦は天正六年（一五七八）には沼田城（群馬県沼田市）の城主をめぐるトラブルからいままで重視してきた義弟重連を毒殺したという。

重連の弟信吉は氏邦を恨み、翌天正七年二月、武田勝頼に内通し、勝頼に沼田城を手渡してしまった。信吉もまた兄の毒殺と同じ運命をたどることを感じ、先手を打ったのであろう。信吉は武田家が滅亡すると上杉景勝につかえた。

◆玉淀河原

鉢形城を望む荒川の両岸は県指定の名勝「玉淀」である。

●北条まつり（毎年四月第二日曜日開催）

武者行列のあと、玉淀河原で荒川をはさんで北条軍と豊臣軍にわかれて攻防戦がくりひろげられる。

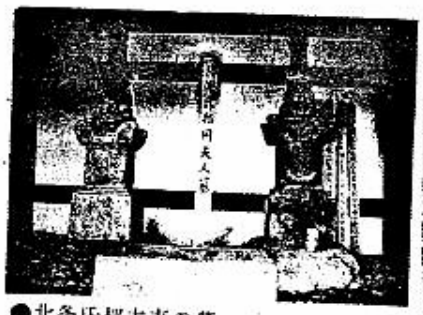
●水天宮まつり（毎年八月第一土曜日開催）

水難除けと安産の神をあがめるまつり。見ものは、玉淀河原で行われるぼんぼりを飾った舟山車の荒川遊覧と鉢形城跡から打ち上げられる花火、夏の夜を彩る。

●玉淀水天宮祭

●寄居北條まつり

◆正龍寺



●北条氏邦夫妻の墓

曹洞宗・高根山藤源院と号す。開基は花園城主藤田康邦、開山は瑞之。青龍が城下に竜泉の湖を造り棲んだといわれる故事に因んで寺号も青龍寺・昌龍寺・そして正龍寺と改められた。本堂左手の墓地、小高い山の中腹に朱塗りの柱の建物があり、中に藤田康邦・西福御前夫妻、鉢形城主北条氏邦・大福御前夫妻の親子二代の墓（共に県指定史跡）が安置されている。氏邦は金沢で死去したが、従臣が遺骨を奉じて帰国し、鉢形城ゆかりの地に葬ったのである。

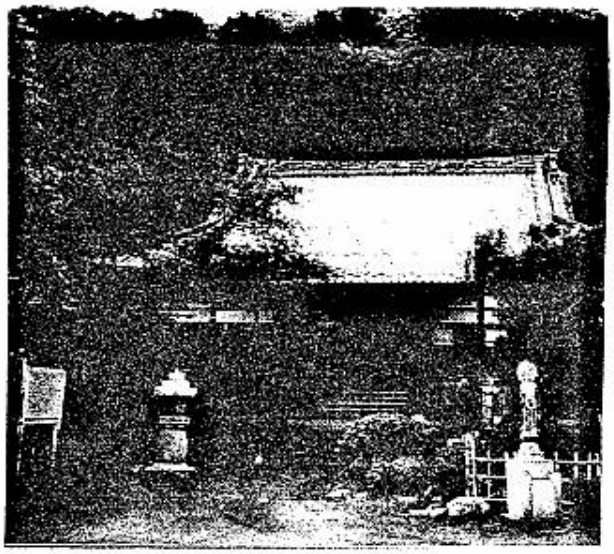
寄居町地域は典型的な戦国期宝篋印塔の分布が顕著であるが、この四基は大型でそれらを代表する名塔である。

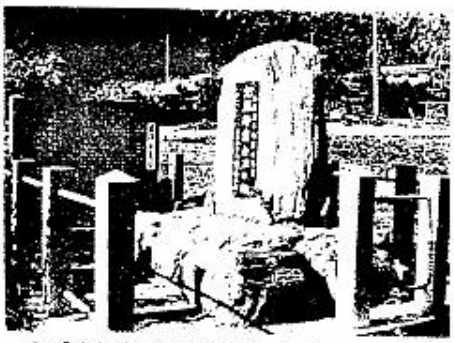
山門（仁王門）・鐘楼・本堂・庫裏は当時のものではないが、古刹の趣を残している。

寺宝として大福御前の所持していたという蒔絵亀甲小箱（國重文）や絵画・古文書がある。県の天然記念物、名木「玉垂の楓」は枯れてしまって今はない。

▼鉢形落城と大福（おふく）御前

天正十八年（一五九〇）五月十三日鉢形城は豊臣勢二万の攻撃を受ける。容易に落城しない鉢形城に向けさらに軍勢は増し五月末には五万余り、東に前田利家、北に真田昌幸、南に上杉景勝、西に本多忠勝らが包囲。鉢形勢は三千五百の弱体ながら要害を利用して良く守る。豊臣軍は遂に南方約一・五キロの車山から大手口に大砲を撃ち込んだと伝える。氏邦は家臣の身を思い、一ヶ月の対戦の後ついに六月十四日城明け渡しの決意をする。氏邦を説得し手引きしたのは正龍寺の住職であった。攻め手の上杉景勝の先頭に立つ藤田信吉は大福御前の実の弟であった。





●「大福御前自刃の地」記念碑

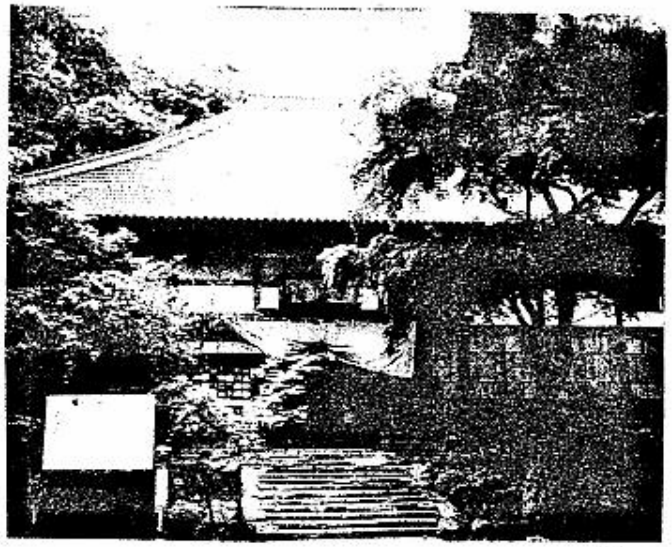
夫の胸中を思う姉の願いは受け入れられ和睦が成立、多くの家臣の命は救われた。落城にさいし、信吉は氏邦と姉大福御前の助命を願い出ている。落城寸前、多くの侍女たちは、なだれ込む勝者の兵の手を逃れ、そそり立つ断崖から荒川の流れに身を投げたという。大福御前は子の光福丸等と共に脱出させられ、正龍寺にはいる。薙髪し、普門品千部満願の文禄二年（一五九三）五月十日、庵内で自刃する。五十三歳という。邦康も正龍寺に入り剃髪し名を宗青と改め、前田家に客分として預けられた。七年後慶長二年（一五九七）金沢城で五十七歳の生涯をとじた。平成七年正龍寺近くの庵跡に大福御前の鉢形城開城の功績を称え鉢形城三鱗会を中心として「大福御前自刃の地」記念碑が建立された。

◆善導寺

浄土宗、白狐山悟真院藤田善導寺といい、別名を藤田道場、又は藤田壇林という。建物は、本堂を中心に山門、稲荷社、観音堂、大玄門からなる。中世の武蔵七党猪俣党の支流である藤田氏の菩提寺である。

この寺は、永仁五年（一二九七）に藤田持阿良心により創建され、武蔵國における藤田派の中心の寺院として栄えた。天文年間（一五三二頃）になって督蓮社法誉智聰上人が花園城主の藤田康邦の後援を受けて復興し、鉢形城主の北条氏邦も帰依して繁栄したが、天正十八年（一五九〇）豊臣秀吉の後北条氏攻略の軍勢による兵火のために破壊され衰退した。徳川家康入府の後、川越から照蓮社寂誉遵道上人がきて再興したので、これを中興としている。

本堂と無常門は寛延三年（一七五〇）に建築された。本尊として室町中期作の阿弥陀如来を安置し、さらに堂内には當町最古の、平安時代



●百人一首の格天井（善導寺）

期作の阿弥陀如来を安置し、さらに堂内には當町最古の、平安時代の木造釈迦如来座像（町指定文化財）がある。また、寺宝として江戸時代初期の「一枚起請文」の掛軸がある。

●百人一首画格天井（町指定文化財）

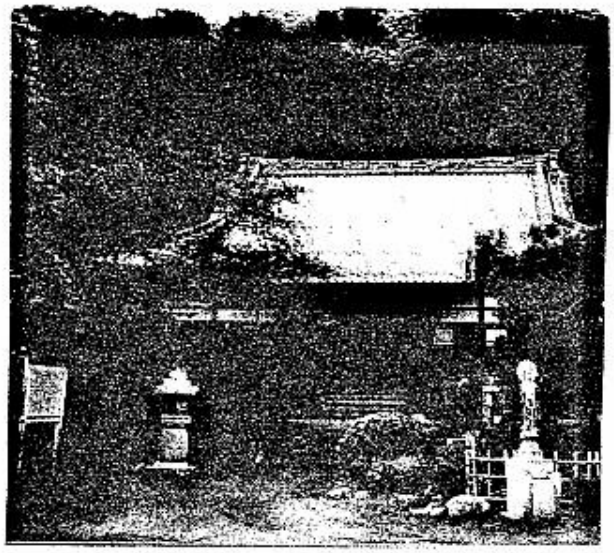
本堂には、一辺約八五センチメートルの正方形の桐材の一枚板に、百人一首を題材として、一枚毎に歌人の肖像画と作歌を記載してある。和歌の字体は江戸時代に流行となった「御家流」と呼ばれている字体である。また、このほか、八枚の板に龍の絵が描かれており、その龍の絵の一枚には制作年代と制作者銘が記載されている。作者は狩野派（中橋）正信の子孫宗信である。制作年代は寛永六年（一六二九）とあり、善導寺再建の時期にあわせて制作したと考えられるが保存が良く現在も大変鮮やかに残っている。

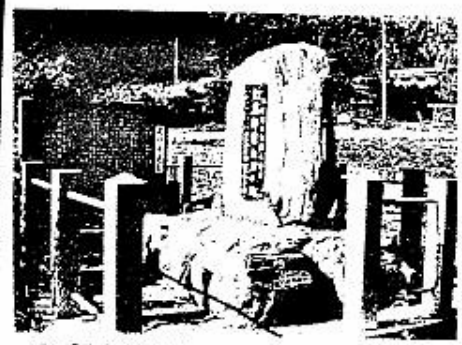
◆少林寺

曹洞宗、萬年山と号す。開山は、永正八年（一五一一）児玉町長泉寺の大洞上人、開基は花園城主藤田左衛門大夫国村（康邦の父）、或いは康邦ともいわれるが確かではない。

本尊は釈迦牟尼仏。寺は戦国時代末度々の兵乱で衰微したが、徳川家康の関東入国後再興され、慶安年中（一六四八～一六五二）三代将軍家光より寺領一五石を与えられる。

大洞上人は石仏建立の発願をしたが果たさず、二十四世住職大純萬明の時、文政九年（一八二六）春から中山道深谷～江戸間の宿々で浄財を募り、六年かかって寺の後ろの山中に釈尊、羅漢の石像、荒神の石碑など安置して信仰の山とした。完成は天保三年（一八三二）三月。山頂に釈尊を祭り、文殊と普賢の二菩薩を脇侍に、その周囲に一六羅漢





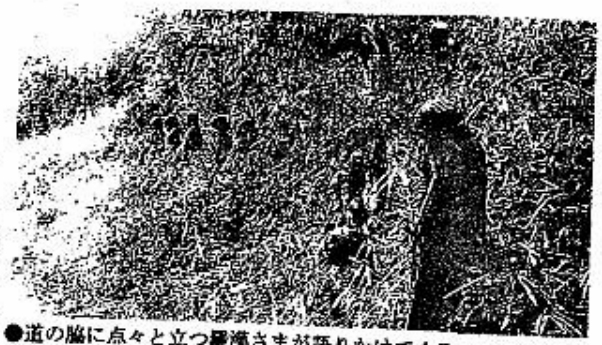
●「大福御前自刃の地」記念碑

夫の胸中を思う姉の願いは受け入れられ和睦が成立、多くの家臣の命は救われた。落城にさいし、信吉は氏邦と姉大福御前の助命を願い出ている。落城寸前、多くの侍女たちは、なだれ込む勝者の兵の手を逃れ、そそり立つ断崖から荒川の流れに身を投げたという。大福御前は子の光福丸等と共に脱出させられ、正龍寺にはいる。薙髪し、普門品千部満願の文禄二年（一五九三）五月十日、庵内で自刃する。五十三歳という。邦康も正龍寺に入り剃髪し名を宗青と改め、前田家に客分として預けられた。七年後慶長二年（一五九七）金沢城で五十七歳の生涯をとじた。平成七年正龍寺近くの庵跡に大福御前の鉢形城開城の功績を称え鉢形城三鱗会を中心として「大福御前自刃の地」記念碑が建立された。

◆善導寺

浄土宗、白狐山悟真院藤田善導寺といい、別名を藤田道場、又は藤田壇林という。建物は、本堂を中心に山門、稲荷社、観音堂、大玄門からなる。中世の武蔵七党猪俣党の支流である藤田氏の菩提寺である。この寺は、永仁五年（一二九七）に藤田持阿良心により創建され、武蔵國における藤田派の中心の寺院として栄えた。天文年間（一五三二頃）になって督蓮社法誉智聰上人が花園城主の藤田康邦の後援を受けて復興し、鉢形城主の北条氏邦も帰依して繁栄したが、天正十八年（一五九〇）豊臣秀吉の後北条氏攻略の軍勢による兵火のために破壊され衰退した。徳川家康入府の後、川越から照蓮社寂誉遵道上人がきて再興したので、これを中興としている。

本堂と無常門は寛延三年（一七五〇）に建築された。本尊として室町中期作の阿弥陀如来を安置し、さらに堂内には當町最古の、平安時代



●道の脇に点々と立つ羅漢さまが語りかけてくる

●厳しいお顔で居並ぶ千体荒神群

を配し、山麓から山頂までの山道に羅漢石仏（山に向かって左側、現存五三六体）と緑泥岩の千体荒神（右側、現存九六〇体）を安置しており、その数と保存において関東一と称されている。

●羅漢……悟りをひらいた仏の直弟子に対する尊称で、羅漢とは仏教のすべてを学んだ修行者の究極のすがたをいう。また羅漢、は「無学」と呼ばれることがあり、これは現代一般に使われているように「学がない」という意味ではなくすべてのことを学んで「学ぶべきことが何もない」という意味である。しかし、羅漢は自分だけがさとりの境地に達して他の人々を救済しない。羅漢は最高の位に達したといえ修行者なので僧侶の姿をしている。

●荒神……三宝荒神は、役行者が造った日本製の仏様であるという。仏法僧の三宝を守護してこれに仇なす悪魔を降伏せしめるという。三面六臂に荒乱忿怒相であらゆる暴悪を退罰するので「荒神」と称する。また、最も不浄を忌み、火は一切のものを焼き払って清浄にするので、家庭にあっては「竈（かまど）」の神として祭るという。この寺の千体荒神は大きさもまちまちで、『三王神、千一体、大荒神、千荒神』などの文字塔が多い。戦時中は戦場の守護神として、現在は選挙にご霊験ありと信仰を集めている。

なお、乃木希次（乃木希典大将の父）寄進による「三宝大荒神」の碑も現存している。

▼末野（すえの）窯跡群（県指定史跡）

正龍寺左斜面の墓地拡張工事の際、登り窯の遺構が発見された。このあたりの鐘撞堂山斜面は七～九世紀の末野窯跡

集団陶部（すえべ）によって焼かれた。窯業地には「すえ」と発音した地名が残されいるが、末野はその好例である。

主な参考資料

埼玉県史第四巻　埼玉県
埼玉県の歴史散歩　山川出版社
史跡探訪関東一〇〇選　山川出版社
鉢形城（パンフレット）　寄居町役場
鉢形城跡（パンフレット）　寄居町役場
埼玉の寺Ⅱ　秋山喜久夫著　埼玉新聞社